

平成30年5月25日

関係各位

熊本大学大学院生命科学研究部産科婦人科学  
教授 片渕秀隆

拝啓

昭和53年春にリリースされ今も歌い継がれている名曲『青葉城恋歌』の舞台である杜の都仙台で第70回日産婦学術講演会が晴天に恵まれる中で開催されました。かつて東西に別れていた日本婦人科学会と産科婦人科医学会（近産婦の前身）の2つの全国組織が発展的に解消し統合され、現在の日産婦の第1回目が昭和24年4月に東北大学医学部中央講堂で開催された歴史的な街での節目の会でした。熊本大学からは26の一般演題に加え、大場 隆准教授がライフワークである早産予防コホート研究（Rainbow Project）でシンポジウムを担当し、4年前の卵巣癌の治療戦略を担当した本原剛志助教以来でした。また、「災害時の周産期医療と危機管理」をテーマにした会長特別企画を坂口 勲講師が、生涯研修プログラムを坪木純子特任助教が担当しました。

若手教室員の全国学会の参加にかかる旅費と宿泊費は、委任経理の『いちこ基金』から全額支援しています。熊本市職員（保健師）だった佐藤市子さん（皆さんに忘れてほしくないので、敢えて実名を出しました）は、平成11年、41歳の時に子宮体癌IVa期で受診され、前方骨盤除蔵術を含めた集学的治療によって7年余の寛解期が得られました。残念ながら再発に至り、婦人科病棟で最初の音楽緩和医療を实践され、平成19年12月10日に初回治療から8年2か月で亡くなりました。ご両親はご健在で、娘さんからの感謝の意として多額の浄財をご寄付なされ、平成20年から同窓会の管理下に『いちこ基金』による支援が始まりました。

教室に在籍している外国人留学生の生活費や医学生学会参加にかかる費用は、『中村ミチコ国際基金』による奨学金として支給されています。中村ミチコさんは、米国留学を経て津田塾大学で図書館学を担当されていた教員でした。平成18年、87歳の時に卵巣癌IV期で熊本市の身内を頼って受診されました。最大限の腫瘍減量術と人工肛門造設を行い、平成19年6月16日に熊本地域医療センター緩和病棟で亡くなるまで、ユニフェム（UNIFEM: United Nations of Development Fund for Women 国連女性開発基金）の日本国内委員会（現在のUN Women日本国内委員会）の活動報告書担当委員長を務められ、東京・熊本を何度も往復されていました。仕事を無事に全うされた中で、東京の関係者の誰もが中村さんが闘病中であったことを知らなかったそうです。主治医だった田浦裕三子先生が聞いた亡くなる2日前の最期の言葉は「明日はトロネ。」だったそうです。養子のお嬢様から2度にわたり高額のご寄付を頂き、国際人であった中村さんのご意思を継ぐために主にアジアからの留学生の支援に充てています。

6月と7月の予定表を同封しました。6月9日の学会では「感染対策」の教育講演があります。

敬具